とお願いし家に引き返し、子供のためにと毛布一枚持って竜山駅に行き列車に乗ることができたものの、列車は何度も途中で停車し、それでも一時間前に先発した列車を追い越し清道駅に着いた。

ところが、ここで機関車故障とのことで、午後六時に着いてから翌朝になっても発車の模様がない。総指揮官から各車両にいる班長に、各自飯盒炊さんし腹ごしらえをするようにとの命令。食事を済ませ、昨夕は部落民の襲撃はなかったが今夜は大変だと心配になり、対策協議をしていると、午前十一時駅員が来て、どうも故障ではないようだ、少し金を渡せば発車するようだとのこと。各班長が集まり相談の結果、一世帯五十円ずつ出し合い二万余円を渡すと十分後にポーと動き出す。馬鹿げたことで、機関士と駅員がグルになっていたことに気づいた。

追い越し追い越されながら各列車は釜山に着いたが、昨日の引き揚げ者も検査に時間がかかりまだ乗船できない始末なので、引き込み線に入っていると、夜中に襲撃を受けカメラ・時計・現金も略奪される等、その上、内地上陸後の落ち付く先や生活のことなど、心配話ばかりであった。

裸の人生行路

山形県　佐藤寅蔵

尋常高等小学校を卒業したのは、昭和四年三月であった。その時日本は大不況に遭遇し国内全土に不況の大嵐が吹き荒れていた。官吏の減俸、会社企業では従業員の解雇、これにともない大都会では失業者が街頭にあふれていた。それに東北では冷害による農作物の凶作が続き農村の疲弊がどん底に陥り、年貢米を納めると食べる米が無く悲惨な状況であった。又、小学校では欠食児童が続出し、一方では可愛い我が娘を花柳界へ身売せるものが続出していたことが、今でも記憶に残っている。私はこんな時代に社会に放り出され生家で農業の手伝をすることとなった。

私は五人兄弟の末子に生れ将来農業で生計を立てる意志は全く無く、自分自身で自活の道を考えたのである。

しかしながら、受験勉強するにも参考書を購入する金が無かった。幸いにも、鉄道職員の友人から受験参考書を貰い受けることが出来た。

その当時鉄道職員だけ年に一度新規採用をしていた。不況により受験者が多く合格採用は至難であった。

昭和十年に、数年前から北朝鮮へ出向中の恩師が帰国された。恩師はその当時、平安南道で公立普通学校の校長在職中であった。私達同級生は心ばかりの歓迎会を催したのである。その席で恩師へ朝鮮鉄道職員の希望を打明け相談し、私はその時渡鮮を決意したのである。

恩師は帰鮮後、早速地元の駅等で調査し受験模様を詳細に知らせて下さった。内容は、朝鮮鉄道でも年に一度採用試験を行うが、数人の採用に受験者が多くかなりの難関であるとのことであった。直ぐ渡鮮したかったが旅費が無くその年は断念した。翌、昭和十一年二月、旅費の一部を知人より借受け勇躍渡鮮したのである。渡鮮後は受験期日まで恩師の家に居候をし、受験準備をしたのである。待ちに待った採用試験が三月中旬頃実施され受験したのであるが、幸いにも試験に合格し三月二十六日に平元線慈山駅、試傭駅手として採用され赴任した。

私も初めて実社会への一人として第一歩を踏み出したのである。同年六月十一日付、朝鮮総督府鉄道局傭人、慈山駅々手に採用、日給一円十銭を給する、の辞令を手にした時、嬉しくてあの心境は筆舌に表すことが出来なかった。只々恩師、友人等に心から感謝をした。それから数年後、順調に資格昇任試験に合格することが出来た。

昭和十五年には結婚のため帰国し、極く内輪だけの結婚式を挙げ、四日後には帰鮮したのである。同年六月に平壌列車区に転勤となり、後に京義線順安駅勤務となるが精一杯鉄道業務に精励したのである。

朝鮮鉄道局路線は朝鮮全道に広がり、朝鮮半島の文化、産業経済の発展、資源開発等、あらゆる面で大きな役割を果していた。南は日本国内より関釜連絡船で接続し、北は南満洲鉄道株式会社線と接続し、一方は満洲国鉄路総局線と接し、アジア大陸の発達に重要な使命と役割を担っていた。ことに京釜線、京義線においては、日鮮満を結ぶ交通の大動脈でもあった。

昭和十六年頃から戦争地域も次第に拡大、熾烈さが増

大して来た。陸軍々部では隣りの駅付近に、平壌陸軍兵器補給廠の分廠に当る、弾薬の填薬所を計画し、昭和十八年当初から業務開始の計画をなっていた。この施設は、主として満州、北支、中支方面部隊へ弾薬補給の円滑を期するための重大なる施設であった。施設の名称は、平壌陸軍兵器補給廠斧山面填薬所という長い名称であった。

私はその筋の某氏の勧めによりこの填薬所へ軍属として転職することとなった。昭和十八年一月に赴任した。担当業務は輸送係として勤務することになったが戦局も熾烈になるに連れて、弾薬輸送業務も多忙となった。業務の繁忙なるにつれて、月日の流れも早くいつの間にか昭和二十年の旧盆に入っていた。

昭和二十年八月十五日午後遅く事務所本部より全員集合命令が出された。私は何かしら不吉な予感を抱きながら集合した。その時、所長松村中佐から、天皇陛下のラジオ放送についての終戦を知らされ、未だに本廠から詳細な命令がないとのことであった。私は後ろから大きな鉄槌で頭を殴られた思いであった。夕刻退庁時の点呼の際明日から業務停止の伝達命令があったと記憶する。

日本人は今まで誰も経験しなかった悲惨な体験と苦難の道を歩くこととなる。まさに天地が顚倒したのだ。三日後解散式が行われたと思う。私達日本人だけはソ連への引継関係調書作成のためいつものとおり出勤した。家族は急に、平壌陸軍部隊のあった秋乙地区へ移動集結命令が出て、官舎地区はてんやわんやの大騒ぎで移動した。

それから間もなく朝鮮人の暴動が方々で起き、日本人財産等の掠奪騒ぎが起ったのだ。何時の間にか道端の電柱等には金日成万才のポスターが貼られ、建国の準備と分かった。私達は引継関係業務完了後直ぐ家族の集結地へ移動し合流をしたのである。

これからの日常生活は、一軒の宿舎に数家族での集団生活が始まった。私の宿舎は八戸世帯、総人員三十三人で、その責任者として私が指名された。八月二十五日頃からは、ソ連軍が当地区へ進駐し、平壌部隊の兵舎は完全にソ連軍兵舎と変ってしまった。

私達は九月頃から毎日、ソ連軍や朝鮮保安隊の使役労働に狩り出された。帰宅時には使役の代償として黒パン

屑を貰い受け家族達の食糧に充当したのである。

私達約四十人は、ソ連軍経済部、洗濯工場へ常用人夫として働くこととなった。そして定職に就いていない日本人は、十一月末頃に黄海に面した鎮南浦へ移動させられた。

私の仕事内容は、洗濯工場に必要なボイラー焚きの火夫であった。ボイラーは立型であった。二交替勤務のため火夫は四人居り、内一人は当時六十歳近い方で今までもボイラー機関士で、一級機関士の免状の所持者だった。私は未経験者であり約半月位は毎日投炭訓練をさせられ、半年位過ぎた頃は、一級機関士より上達しほめられた。

妻はミシン掛けとして働いた。勤務時間は午前六時からと午後二時の二交替勤務であった。午後から勤務の時で月夜の晩などは、休憩時には外に集り月を見ながら、此の月は故郷の人々も見て居るだろうし、又故郷でも私達の安否を心配し、今はどこで何をしているのかと思っているだろうと、故国のことを偲び、切ない思いをしたものである。

私達は日本人会を通じ、何回となく日本への引揚げをソ連当局に陳情したが、帰してはくれなかった。とうとう二十一年の夏も終りに近付いた八月の中旬頃、私達でソ連軍経理部の責任者である「ミロクノフ少佐」へ帰国許可を請願したのである。少佐は、今直ぐに帰すことは出来ないが、朝鮮人の交替要員が出来次第に引揚げを黙認するとの解答を得たので、私達は非常に嬉しかった。それから引揚げ脱出準備のため、闇トラックの契約、その他の準備をし、その時期を待機したのである。少佐は、八月三十日遂に「明三十一日、日本東京〝ダモイ〟」を言い渡したのである。

「もしも、引揚げ途中危険で行けない場合は、帰って来い、何時でも君達を元通り使用する。途中十分注意して帰ってくれ、君達は長い期間、良く真面目に働いてくれて大変ご苦労であった」とねぎらわれ、私達一同は少佐の暖い心情に心から謝意を表したのである。

昭和二十一年八月三十一日未明、闇トラックに総員一〇三人乗車し、秋乙地区を後にし南へ向って出発した。平壌より開城までは約二〇〇キロ位の距離である。自動車

で走って直ぐ第一検問所があり、保安隊の取調べを受け所持品の一部を没収され、約一時間の間に数回保安隊から取調べ検査がありその都度所持品が没収された。自動車が約一〇〇キロ位の所で、運転手は、とてもこの先からは自分も危険をともなうため運転出来ないので、下車すると言われ、交渉したがどうにもならなかった。運転手も、保安隊より何度も取調べられ叱責されていたので身の危険があったものと思う。

私達は止むを得ず、その付近の部落から牛車を雇い入れ、子供と老人を乗せ、それ以外の者は徒歩で行くこととなった。途中の部落では数回、朝鮮人の子供達から小石を投げられ日本人の馬鹿野郎共と悪口を言われたが、後の仕返しが恐ろしく抵抗は出来なかった。敗戦国の情なさ、残念さを痛切に感じたのである。私達一行は日照りの日も豪雨の日も黙々と行進を続け、日没になれば橋の下あるいは畑の中、教会の軒下等で野宿をしながら三十八度線を目指したのである。此の間二回、若者達から建国資金を強要されたこともあった。何時如何なる事態が発生するやら計り知れず、毎日が恐怖におののいた。

ようやく三十八度線近くに辿り着いた。ソ連兵達は眞裸で陣地構築をしていた。三十八度線は、小高い丘を越えた小川が国境であった。丘の麓には、又検問所があり、徹底的厳重な所持品や金銭の検査があり今迄隠し続けた金品が没収され、お前等程今迄に金品を持った奴はいなかった、ふとどき千万な奴等であると脅かされた。私に、残った所持品は、鍋一個、水筒二個、子供のオシメ数枚と隠し通した僅の金だけであった。三十八度線の丘を越したのは、その日も大分日暮れに近づいた頃であった。魔の国境を、幸い全員無事脱出した時は皆な手を取り合い涙を流し喜んだのである。国境より数百メートルの処に、日本人会の世話役の方が出迎えてくれ私達の無事脱出を祝福してくれた。約三十分ほど歩いた処に、日本人会の借受休憩所があり、ここで食事と数時間休憩をし、開城の収容所へと向った。私達は三十八度線を越えた安堵で一度に、どっと疲労感が出て歩行するのが辛らかった。これは全員が同じであった。私は長女を背負い、妻は二十年春出生した長男を背負い、牛歩のように歩いたが、子守りバンドが両肩に食い込むように痛く、開城ま

では全く長い長い道程であった。やっと午前一時頃、テント村収容所へ辿り着き、重荷を下ろした。平壌秋乙を出発して六日目に、漸く親子無事開城入りしたのである。

この収容所には、検疫のため八日間収容された。収容所は入所者が数百人収容されて居ったと思う。八日間の生活中、病気、栄養失調で毎日数人づつ死亡していた。翌日は米軍の大型トラックが来て、その死骸をどこかへ運んで行った。自分も何時こんな立場にでもなったらと思うと思わず背筋が寒くなる思いがした。

ここでも私達一行は無事に終り、開城駅へ向った。開城駅からは貨物列車に乗せられ、米軍の乗車警備のもと釜山駅へと走った。やっと釜山駅に着いたのは九月十四日であった。当日は釜山港の元税関倉庫のような所へ宿泊させられた。翌十五日、米軍のリバテー型貨物船へ乗船させられ、同日夜、博多港に到着したのである。博多でも直ぐ上陸は出来なかった。検疫のため船内に留置された。私達は毎日、船の底から這い上り、甲板から手の届くように見る陸地に上陸出来ず残念であった。

幸い船の缶詰生活も事故も無く終り、待ちに待った上陸の日が来た。それは昭和二十一年九月二十二日であった。皆が甲板で歓声をあげたのだ。上陸が完了したのは、十一時頃であったと思う。桟橋まで援護局係官、婦人団体の方々が出迎えてくれ、一人一人に、ご苦労さんといたわられた時は、思わず涙を流した。又一人宛握り飯が配給され、誰一人として泣かない者はいなかった。私も妻や子供達の手を握り、大粒の涙に濡れたのである。その日は博多の宿舎に泊り、翌二十三日は、これまで長期間苦楽生死を共にした同僚と涙で別れ、一路それぞれ懐しの故郷へと向ったのである。

私達親子は、二十四日夢にも見た故郷へ着いたのである。一年以上音信不通で生死不明の家族が四人共、無事突然の帰国に、生家ではびっくりした。その晩は生家の家族一同で私達の無事帰国を心から喜んで祝ってくれたのである。その夜から、なんの恐怖感も無く、ぐっすり安眠出来た。翌日は親類の挨拶回り等して終った。帰国はして見たが、今後の生活について、不安で心が揺れ動いた。二十七日から毎日酒田市方面に職探しに出歩いた。足を

棒にし探したが職がなく二日間は終った。二十九日、ようやく運輸省の出先機関である運輸省第一港湾建設局酒田港工事事務所の小使として採用が決り、勇躍、帰宅をした。

昭和二十一年九月三十日より出勤し、その日が、人生行路、再出発の記念すべき日であった。勤務箇所は工事の現場監督する事務室で、当役所では見張所と称していた。業務内容は、朝の掃除から始り、便所、倉庫等の清掃、水道施設が無いため、二〇〇メートル位先の建設省事務所からの貰い水運搬、その他、事務所と他の見張所間の書類送致等が主であった。かなり苦労の多い仕事であったが、家族の生活を思い耐え忍んで頑張り通したのである。業務も約一年で石材検査係へ転じ、後、倉庫係となり、二十三年十一月十五日付傭人工手の辞令を受けた。二十五年には技術員工手、二十七年四月一日付で事務員に任命された。三十年四月には、運輸事務官へ昇任することが出来た。在職中一度だけ、管内事務所を統轄する、運輸省第一港湾建設局へ転勤した。又酒田の事務所へ舞い戻り、昭和五十三年に退職したのである。

今この長い人生行路を振返るとき一度は戦争により丸裸となったが、延四十数年の長い役所生活を無事過して来たのも、上司、先輩、同僚のご指導とご協力の賜であり、心から感謝するものである。

昭和五十四年十月から当地、遊佐町選挙管理委員会に選出され、二期目は昭和五十八年十月から委員長に選任された。遊佐町の一行政機関の重大な責務を果し、昭和六十二年十月同職を退職し現在に至るものである。

父と娘との絆

兵庫県　山崎虎蔵

私は昭和二十年九月二十四日、朝鮮の北端、新義州の刑務所に侵入したソ連軍の手によって、平安北道警察部員と、新義州警察署の日本人警察官百余人が逮捕されて収容された。

これは八月七日北鮮に侵入したソ連軍が、私たち警察官を、軍人同様に戦闘員と見なして、その労働力を自国